



道二翁道話五篇

中

拾

一

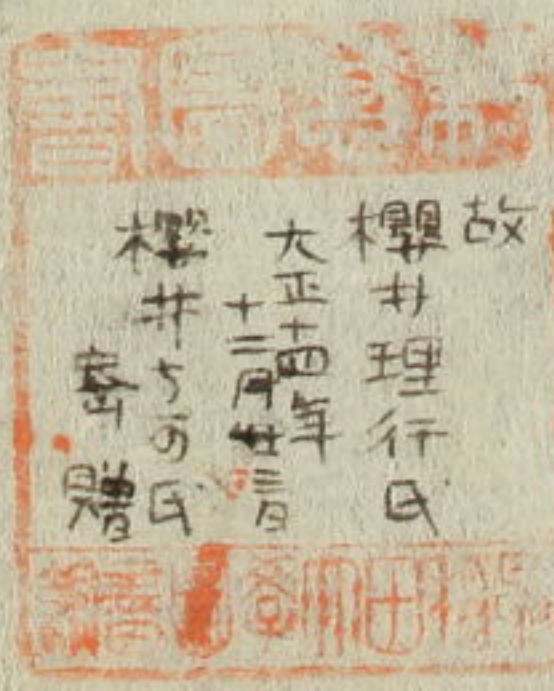
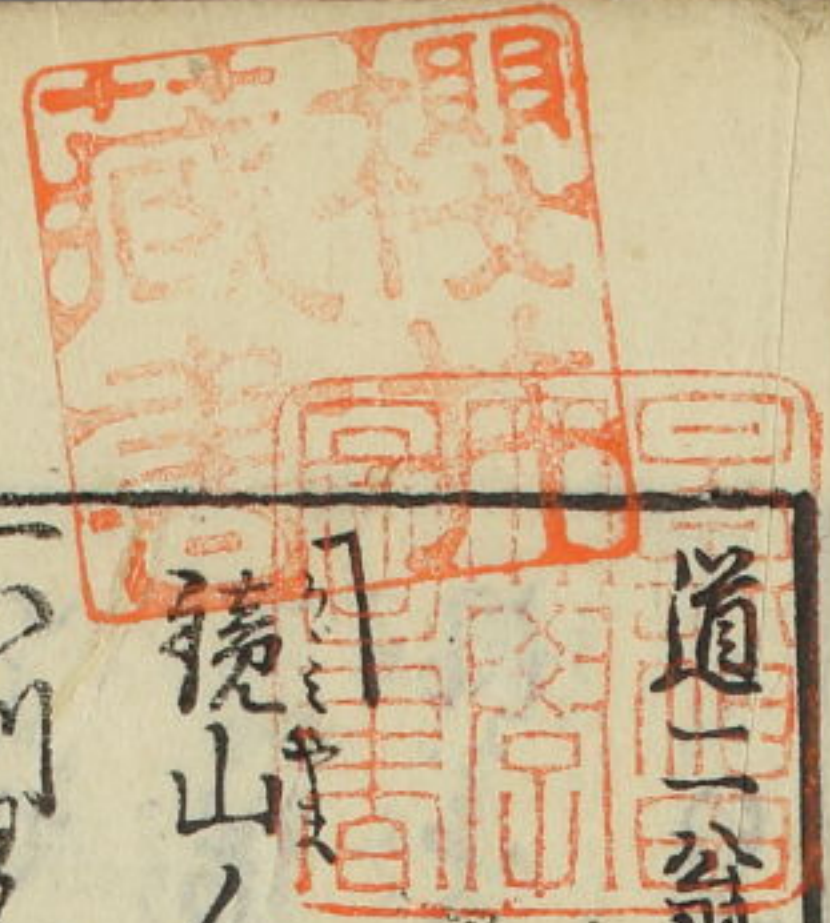
9
3406
11



道二翁道話五編卷之中

浪華 八宮齋 輯

後山人の志望うへ先見へそ我々の上りうへみ海
 一のうへとほしみの我理をつい熱くて人の害にあらんこ
 ろのうへうへうへうへうへうへうへうへうへうへうへうへうへ
 せむ人の教うへは是等乃うへとせむのうへ大なる事の中うへ
 ろめて居るまゆ人目が明と何うかなくいかしいと朝うへ
 曉まてうへとせうへけ。我理うへけ何とわい金ののうへや
 金うへけはばとせうへ人々と実例してと金にして
 せうへうへうへうへうへうへうへうへうへうへうへうへうへ



9
3406
11

るのどや。去来乃火中よすか焼く梅の本が。今来乃
去焼ゆりの枝うら芽と出く不肖な顔とせんに。然
嘆てござる。此衆達乃又不幸あまはく。天を曲る
こつみゆりか。其性命正しく。家業と懐出くは
る。此危達のみ若くは。大なりして。此しうさる
火事又遠くこつみゆり。借残のこつり。まうさるこ
つみゆり。無心をいつい。死ごといふ。借徳はし。然
ての借このつと中ぬ。中うは。雨が降る。かき物と
風が吹く。つみゆり。死ご物と中ぬ。二面。気が照
しの中と。坊とつみゆり。のどや

つみゆりをばし。無理とつみ。想どて人の害なかり。さ
路かて仕は。大なる科人。どや。此中うらりの。い
る。と。天を様う。御禁めらる。さ。い。ご
どや。皆。諸。心得。で。ご。り。ま。ね。此。天。の。乾。え
人の呼吸。又。通。て。命。と。あ。ま。は。さ。る。中。人。の。出。入。の。息。の
どや。まで。皆。是。天。の。所。用。な。る。ゆ。に。死。ぬ。る。こ。の。い。ま
か。く。長。久。さ。り。の。どや。佛。家。で。是。と。無。常。を。ま。よ。と。云。孔。子
と。仁。者。の。事。と。仰。う。も。て。天。の。無。心。は。し。て。万。物。生。く。こ。の
な。り。ゆ。り。で。死。ぬ。る。こ。の。い。ま。虚。空。の。ふ。る。の。どや。と。い。ふ
ご。さ。る。是。で。と。合。点。乃。悪。い。は。方。り。其。中。う。ら。ま。生。通。り

其のちう。死でもそのがまへるまじどや。や。し。も。食。も。ふ。ま。
ま。の。と。ま。ふ。て。こ。ご。る。は。方。ま。あ。る。の。ど。や。ま。の。骸。む。ら。
か。り。の。身。用。で。此。目。よ。見。ん。ぬ。廣。堂。の。天。が。お。め。り。て。ご。
ご。ら。ゆ。が。怪。ま。ら。う。ぬ。夜。迷。ひ。う。ま。ま。ぬ。

く。き。より。晴。と。道。よ。ぞ。入。ぬ。ほ。遥。と。懸。せ。山。の。露。乃。月。
学。問。の。道。他。は。し。其。放。心。と。求。む。の。ま。ま。ゆ。り。て。見。ま。ば。
迷。ひ。の。ま。い。神。用。一。原。於。微。隔。は。し。と。ふ。て。心。の。好。骸。の。法。心。
の。神。必。用。必。と。心。と。一。相。は。して。見。る。り。受。る。り。自。由。と。る。
一。つ。ひ。て。こ。れ。と。費。く。此。骸。よ。水。が。お。れ。が。冷。と。心。が。知。る。是。
で。心。と。必。と。一。致。は。して。神。用。隔。は。し。又。骸。む。り。り。で。知。ま。ぬ。

泥。撥。よ。や。死。人。よ。あ。を。を。う。け。て。い。ま。ぬ。ま。せ。る。れ。が。心。が。ぬ。い。ゆ。
い。や。是。を。む。怪。む。泥。撥。い。ぬ。い。何。と。ま。ひ。る。し。ど。や。こ。ご。り。ま。せ。
ぬ。う。あ。難。い。と。し。ど。や。は。後。の。中。乃。あ。う。て。う。則。天。い。や。
是。私。の。し。ど。や。ぬ。い。ぞ。あ。難。い。の。ど。や。多。れ。ど。も。心。の。結。搦。ま。
あ。い。ど。や。あ。難。い。の。ど。や。ま。ま。く。ぬ。親。が。心。が。ゆ。り。着。く。御。
ら。じ。ま。せ。何。よ。も。彼。よ。ま。り。の。ど。や。ぬ。い。是。で。心。必。一。相。神。用。
一。致。は。して。隔。の。ま。い。心。を。は。合。ま。さ。う。り。ま。せ。是。の。心。と。い。ゆ。り。ま。
は。と。ど。此。の。あ。う。て。う。ま。ま。せ。て。い。ま。ぬ。ま。せ。て。い。ま。ぬ。い。
天。の。あ。う。て。う。茶。乃。と。め。て。ぬ。る。い。ゆ。て。お。も。が。天。乃。本。
来。堂。へ。ゆ。り。の。ど。や。是。と。本。来。堂。へ。帰。る。の。本。来。堂。う。

道二道 結五篇 卷廿一

素て知るのち中なる番いふやうい。即今此方この
 ま。虚空法界とは性は根なるがゆへ火を入れても焼ばあ
 又ても瀧さば生じらるるがゆへ離さば死すとの入ると
 死するもまたたへが水とよ浮る月の水と濡るるも
 く。うらぎあはる生か得て。天地と共に腐死して鬼
 神と共に若死と見る。実の面白きはうらとまらるる空と
 なるうらとまらるるの中。ま一紙抄して後きお換るる
 ぬ可憐なりや。どふぞ信心起して知門てはらう
 どもせ一剎の内のは那屋が知る。と家内が安樂なる
 妻の眷属一家親類出入方々。知喜近付門旁のまらん

なまぞが賜るるのどや何とら今も終の財宝に迷ふて息
 りはどふてまらるるの縁にどふて。曾孫よらどふ
 一の縁の縁よらどふて。鬼の縁にどふて。い
 我々惑を門うら。明張申。世界中の縁令と集めても
 ぬ。常用を明ても書ても。とたまはるる。月日
 を送る。勿神といふ。や難儀せよ。やかたぬ。やどふ
 ぞ。お心知りて。はらう。しませ。し。斗。あ。ま。立。降。る。の。と。知。る
 と。此。方。の。ま。で。今。日。の。み。難。い。の。を。知。る。ゆ。へ。中。く。う。ら
 へ。く。わ。ら。る。の。ど。や。あ。ら。天。地。の。間。よ。ら。あ。ら。天。下。中
 ぎ。や。ら。あ。ら。の。ど。や。あ。ら。の。ど。や。あ。ら。天。下。中。や。ど。う。う。く

と飯喰ふくはるむりつてあつた。あつた天とトやあつ
 ぞ人々の道其るのあづきやうを勤め終るむらまで
 せよ出現くこのめでやううへんは出このトやあつた天
 地いふ論一切万物會歎本江河の鱗敷雲甲ぬまのよ
 皆人々のうへ河若翁の河次やとつらうと目とさま
 又又と帰つてあつた。あつた天とトやあつた天
 此月よるぬ天が慈悲の根元一切万物皆此天うへ光明遍
 照十方世界と出現あつた。あつた天とトやあつた天
 捨あつた。あつた天とトやあつた天とトやあつた天
 モツ光明とあつた。あつた天とトやあつた天とトやあつた天

あつた。あつた天とトやあつた天とトやあつた天
 即此燈火火神の火是もイ火とわうり見ている。あつた天とトやあつた天
 いふあつた。あつた天とトやあつた天とトやあつた天
 カチツとあつた。あつた天とトやあつた天とトやあつた天
 飯とあつた。あつた天とトやあつた天とトやあつた天
 冬向はのほけさつた。あつた天とトやあつた天とトやあつた天
 是る人があつた。あつた天とトやあつた天とトやあつた天
 つた火燈でのさつた。あつた天とトやあつた天とトやあつた天
 多神あつた。あつた天とトやあつた天とトやあつた天
 らぬあつた。あつた天とトやあつた天とトやあつた天

燈さば挑灯ぞうり提めるひく。何の燈さばさりのトやまの溝へ
 をまわらう石に踏ひたりせよやうらぬ雪原へ立付て来て
 所助け下さる。深く微妙の光明を。押さざうくで仕立入る
 わかちて消しうらで消しうらと罰がらう。ごごご
 での大きな目と遠くへのトや。叔此光明の席よ。受て受く
 のうらひのなるぬらぶある。先今日目人や親は様の光明
 て。世間のへが。イスラフのくまらる。瓜自子の光明のやうと思
 て。ごごごのうらひの我理張てある。あトや。まが挑灯の礼
 を。ごごごのうらひの。あトや。若い衆のえまけ。どうはう。燈や。
 美石へ出れ中てある。女中。方。狼の筆や。彼者の紋付まの
 ぞ。一回史も燈さば挑灯ぞうり。あうりく。きげてある。ご
 こ。入。踏。う。ぶ。ろ。中。う。知。ま。ぬ。あ。ぶ。な。い。り。ト。や。又。水。り。ご。ご。ご。う。せ。り
 ぞ。ご。ご。ご。戸。を。振。ま。い。水。り。光。明。ホキヤアト。歌。ま。路。入。出。は。月。と。ま
 の。ご。ご。ご。ト。や。則。今。月。の。我。と。所。助。け。下。さ。る。所。若。方。の。所
 姿。多。許。な。い。り。ト。や。茶。方。も。此。は。後。は。と。ま。ご。ご。ご。れ。が。或。は。方。が。美
 様。の。ご。ご。ご。と。後。付。て。イヤ。光。明。ト。や。の。は。助。け。の。と。ま。い。る。ご。ご。ご。
 我。さ。の。其。様。の。り。の。で。い。助。う。ぬ。先。自。理。張。て。ま。ご。ご。ご。れ。が。今
 日。が。助。う。ら。ま。ぬ。ら。う。は。方。が。あ。ご。ご。ご。を。換。う。ら。バ。水。も。史。も。二。三
 日。此。方。へ。教。ま。ぬ。ら。ご。ご。ご。ト。や。ま。で。い。忽。ち。滑。て。死。な。ま。ご。ご。ご。ら。う
 ぬ。スリヤ。大。切。る。此。命。と。助。て。ご。ご。ご。ト。や。ま。い。う。と。ご。ご。ご。ご。ご。ご。ご。ま

ぞ。一回史も燈さば挑灯ぞうり。あうりく。きげてある。ご
 こ。入。踏。う。ぶ。ろ。中。う。知。ま。ぬ。あ。ぶ。な。い。り。ト。や。又。水。り。ご。ご。ご。う。せ。り
 ぞ。ご。ご。ご。戸。を。振。ま。い。水。り。光。明。ホキヤアト。歌。ま。路。入。出。は。月。と。ま
 の。ご。ご。ご。ト。や。則。今。月。の。我。と。所。助。け。下。さ。る。所。若。方。の。所
 姿。多。許。な。い。り。ト。や。茶。方。も。此。は。後。は。と。ま。ご。ご。ご。れ。が。或。は。方。が。美
 様。の。ご。ご。ご。と。後。付。て。イヤ。光。明。ト。や。の。は。助。け。の。と。ま。い。る。ご。ご。ご。
 我。さ。の。其。様。の。り。の。で。い。助。う。ぬ。先。自。理。張。て。ま。ご。ご。ご。れ。が。今
 日。が。助。う。ら。ま。ぬ。ら。う。は。方。が。あ。ご。ご。ご。を。換。う。ら。バ。水。も。史。も。二。三
 日。此。方。へ。教。ま。ぬ。ら。ご。ご。ご。ト。や。ま。で。い。忽。ち。滑。て。死。な。ま。ご。ご。ご。ら。う
 ぬ。スリヤ。大。切。る。此。命。と。助。て。ご。ご。ご。ト。や。ま。い。う。と。ご。ご。ご。ご。ご。ご。ご。ま

でやうくは合点のまじり

叔父あるに方私たが着てある綿入本綿。此りといごころ
出来ごぞ。おまごくして出来のりいじやない。さき物よも
かゝりけの濃くにはなからば甚深微妙な綿とてが
いかりしてあつてうまを凌げといふも。天よりあつて
流る綿入とては助け下さる河次女いふくも天よりて
大地のぬの胎内とやどり。夏秋津若分たれ乾る変化
一室即是色光明遍照十方世界と成り多し。恰時か
いらいせと着て助す。布子と着て助す。天
の雲とていふのいふはまをさかしくいふのやうおまごく。

おまご合と出して愛ふことらふのよ縛らる。百姓衆いおま
がゆることらふのふさふさく。大切な功德とてしてわれ勿
祈るいふとや。を百姓衆い天命の賦分を種裔とて棄
てらるの由世活いなるけきと。細工は一もも出来
るのどやない。忽ち此跡の中なる不願が續くと。何があど
百姓衆が奉例して。綿のふらぬといふははやうなるい。此
又不願が目よ入るものではなけきと。是より細工人がある
てや。天より古今来うまぬ。いふのうとと老角中の
終る若らうの。信しやうあつて来ると。松先をきまへる
く。おまごく我すといふ若らう。其背尾が親子喰ひま婦喰

福来と。最勝王經曰。由愛敬惡人。治罰若人。故是宿
 及風雨不依時節等。又云。又聖德を以て治す。人神
 の上よ抄いて。聖德を以て。山川海濱まで。其澤と也。此
 比のふくむ。況や又教草本禽獸を抄いて。抄や。此等
 の聖人神佛の御徳文。や。一人滋と。教と。れ。虚空法界
 を引奪する。といふ。凡雨附は順ひ。又日の凡十日の雨万
 物然化盡し。草木瓦石。皆空のり。又教よく出来。衆人
 和合し。國治り。家齊ひ。後く。といふ。来ると。ある。此
 も。比。大切なる。や。是と。傳。て。見。申。する。酒の。ま。る。る。に。よ。
 由し。所と。抄。し。入。る。と。本。の。酒。は。か。る。奇。妙。なる。め。下。や。

桑も。能。利。し。の。ド。や。ま。ど。や。ま。の。と。抄。へ。入。る。に。は。ぬ。流
 掃も。世。法。を。と。れ。び。の。乾。柿。と。か。る。又。依。の。内。く。大。に
 の。う。り。と。る。ま。い。皆。み。の。教。を。く。妙。未。難。義。と。る。と。是。と。ま
 依。ん。う。り。と。る。ま。い。若。い。流。女。中。方。年。あ。て。し。不。悞。る。氣。慎
 る。く。爾。より。出。る。物。の。爾。は。降。る。方。と。又。よ。不。審。が。あ
 る。に。舜。王。禹。王。湯。王。の。と。る。聖。人。の。御。代。は。也。九。年。の。洪
 水。六。年。の。旱。魃。五。穀。種。と。失。ひ。其。外。種。く。換。く。の。憂。が
 あり。万。民。大。き。よ。く。し。む。又。孔。子。の。御。在。世。は。也。困。く。又。噎。嗔
 あ。り。て。大。神。御。若。勞。る。と。れ。の。ド。や。ま。い。此。教。を。あ。そ。く。あ
 る。の。ド。や。安。が。こ。れ。大。福。と。あ。り。て。い。どの。申。う。る。結。構。の。御

大事ののどや。人の糞も内どくりでいまきりぐらゐい。此はダ
 命氣トヤ。此はつらふのうらゐいと。飴ちまうせんの中うよひの
 付合してごふしは中うのゐいものトヤ。ひよのとま居り相續と
 つの中うよふで大勢押合入てう。若死しの中うよひの
 て仕合入まてり後。ぬソコテ天の命星天降りて人の糞よ
 皮と居りごらるゆへ此が健固でおてらる。何どあ難いの
 トんまいつら。此はつらふやよふんく。命氣をふて去をえらる。
 則糞トヤ。已よ免て後。復るを仁とふ方り即人のるまや。
 其已ご出。やよふんく。命の覺よ瀧まてて去せ命トくと
 めんふ命と命。是が命氣の去めらゐい。命と命と命の
 まつらふ。又命銀困窮もるし。命神の祟りトヤ。一切万物も
 神にあう。さるものりゐい。其神よんれを相合る。あまありか
 多い。睡物を炊ひ暖火よ患。或り咽り濁く。時飲水のゐい。水
 水神のさる。復病よ苦トと。又出る。又まふ。火神のさる。
 本材本に事欠。食物よ不自中。方る。本の神の祟り。命
 よ。勝もま。不喜。睡る。是れ。命のさる。此は命
 こと。易。天。水。を生。火。と。ひて。此。命。は。じ。め。り。瀧。の。あ。
 即天のま。ま。ま。此。糞。が。さ。り。ト。や。元。来。天。の。雷。り。で。
 押のま。が。心。で。も。ら。い。の。と。已。が。物。う。て。我。あり。心。あり。と。お
 の。て。わ。ら。ぐ。ま。ま。ま。や。其。迷。ひ。と。ま。し。て。う。め。る。を。愚。

道二道言五篇 卷中

又外の物トやまの虫腹の中の腹も何と云うべき物トや
 ぞん腹の中は炭團に在てゐいぞ牛も馬も後程と
 腹の中がうつうつゐ其外一切万物人回禽獸草木江河の
 鱗類虫甲虫蚤虱の腹の中まであつてゐ阿字もふつゐ
 ない此何と云うか去と死る釋迦と孔子と阿字が去ると
 りのぐまきぬ此中も物つゝ阿字の功用阿字の生この
 阿字も名物トや生と阿字陀いどんるよとやぞ
 天何言哉四時好悪百物生吾天何言哉
 喉を飲よよ心人養人喉を養るの事と知進
 其中と云はして刀をば何よと云ふやとい予欲無言と

又さういでも知まてゐるや熱いと云りぬ先うと火にあつて
 涼いと云りぬ先うと水に涼いのりうと云りぬ先うと日月
 よもくある刀を事な花と云りぬ先うと刀を事な花と云
 てあるよとい人と云りぬ先うと吾人よとい人と云りぬ先うと
 悪人何よと云りぬ先うと及りぬ法華經と止止不須説我法
 如維思と思案分別を離さく道に天地よ先達てある
 其今日天令又順い
 「さういふものの事と云へばおらぬそのみ知ぬ明日の日
 明日の事も兼ねた今日の道がなるや道とい何ぞ
 の糸は其の踏石今日の上が道トや

法華經の心をまゝに世の中又奮發し怒り法を説く
 一切妙法は阿耨多羅三藐三菩提の道に在り。誰が世法を以てて修め
 ると世界の中なるを起るらるるくわうくわうく何ものが啼き
 粟の本に粟の出来ると妙法極の本に極の出来ると
 妙法極と出来ると妙法極の出来ると法。一天に海皆瑞妙
 法生と蓮華生と妙法蓮華經の中は若る人志や。天の
 如く御恵くるるる大地の法が御法なうれて一切万物地
 中なるものいなり而見れば皆天地の御分なりや。勿
 律なるゆとりや紙一枚葉一筋と麻束の如くする物
 うと何なりと亦もま歸りて天のふるたのその実面白
 きみ換る。何と云ては是又加へん。此と云何がみぞ御代
 も多いよ今のやうな結構な御代はせもそく未だの未だ
 酒登の酒を。瑞の酒世と晴々出せば大安樂。天のふる
 る樂をまぬれ。疾が明ると何がや。いかに。其
 刺と知りぬ。儉約をようせぬ子曰飯蔬食飲水曲肱
 而枕之樂亦在其中矣。三度く喰ふ何のふるや。後
 へうとさ。いよい難なるる何のふるぞ。思ふ入るる
 たるが天のふる樂。冥加をまれば難い。今日
 をまぬ八抹造りの何の雨露は濡まい。冬の風とふ
 せぐん。玉樓金殿の何のふるや。菖蒲屋の何のふる

きみ換る。何と云ては是又加へん。此と云何がみぞ御代
 も多いよ今のやうな結構な御代はせもそく未だの未だ
 酒登の酒を。瑞の酒世と晴々出せば大安樂。天のふる
 る樂をまぬれ。疾が明ると何がや。いかに。其
 刺と知りぬ。儉約をようせぬ子曰飯蔬食飲水曲肱
 而枕之樂亦在其中矣。三度く喰ふ何のふるや。後
 へうとさ。いよい難なるる何のふるぞ。思ふ入るる
 たるが天のふる樂。冥加をまれば難い。今日
 をまぬ八抹造りの何の雨露は濡まい。冬の風とふ
 せぐん。玉樓金殿の何のふるや。菖蒲屋の何のふる

トヤ雨露はぬきまいたる。冬は氷と融んたり。春は花
まがまの食物天のよめる樂も。夏は汗の汗物天のよ
る樂も。夏の西風の寒の。飯の足もあつぬきのまで。
其時この物もあつぬきも何ぞせんせの中う。又天のい
たてまいわと世話と中さ。悪もきせ祿も悪もあぬ。大悪も悲
の所悪も勿祿もあつぬきも。此廣大の所慈悲も物
をぬいてぬる。此天のよめる樂も。夏も秋も。秋も
何とぬてう。これに加入。此道理を中合する。一カ物も
天の所光明トヤ一切天の所悪も。志や何と。是が女。是
はう。是もあつぬきの。此道で。此功德と八百萬の祿と

つ。即。一切万物の。トヤ。皆。此。國。の。祿。也。多。く。此。種。族。
も。あ。つ。ぬ。き。也。此。廣。大。の。所。德。と。此。跡。は。心。得。已。が。あ。つ。ぬ。き。
ま。小。一。切。の。物。を。き。ひ。減。し。無。益。よ。そ。こ。ろ。ひ。ぬ。き。也。天。
津。滌。と。く。敷。時。串。刺。生。利。送。利。許。々。古。久。乃。衆。と
つ。く。は。涯。多。人。窮。は。して。食物。不。足。衣。敷。も。事。々。う。あ。つ。
へ。は。る。又。結。構。る。家。屋。を。構。へ。令。根。沢。山。あ。つ。ぬ。き。も。病。
も。あ。つ。ぬ。き。也。何。喰。ふ。て。も。味。あ。い。喰。ふ。ぬ。き。也。トヤ。天。の。後。
樂。も。あ。つ。ぬ。き。也。あ。つ。ぬ。き。也。猿。も。あ。つ。ぬ。き。也。月。花。の。樂。も。あ。つ。ぬ。き。也。只。只。只。
も。あ。つ。ぬ。き。也。何。と。の。よ。も。金。の。も。あ。つ。ぬ。き。也。や。く。と。令。を。抱。
へ。く。根。の。國。危。の。國。も。あ。つ。ぬ。き。也。乃。と。目。も。あ。つ。ぬ。き。也。

うづ。其心得の出来ぬといふとて、残念ののどや。
 天のよふる樂が目よんぬうどや。三しんる世界せかいの一切
 衆しゆも、天のあまの攝取しゆく不捨ふしやよりのこゝろのつとよふい。
とんのい河がの鱗うろこ類るい類るいでも、までも、皆みな一切衆生
 の如ごとくやどとおもて助たすけぬといふい。是こゝろのこゝろのやう。是
 の鳥とりよやうと誰たれが食物じきぶつとよふといふい。終しまは鳥とりが
 自みづか滅めつくといふい。又また山奥さんおくでも、然しかしくまの拵しら取と不捨ふしや緒
 のとての攝取しゆく不捨ふしやで助たすけておる。能よ接せつは、是こゝろの然しかしくま
 これの後のちよやうと。食物じきぶつおておて中ちゆうのいふい。後のち
 二ふた定のぢやうのいふれい犯はんままくくわわくく事ことももなないい冬ふゆのつら間まのあひだももなない。
 雪ゆきの中ちゆうよ食物じきぶつないがどや。てまておるぞ。何なにと食く
 て助たすけておるぞ。ふふくくままののどやど人ひと皆みな天あまの御み意い
 の雅みやびいといふぞや。

道二翁道話五編卷之中終

